

◀越谷市制施行記念式典(昭和33年)



▼越谷町役場庁舎(後の市役所庁舎)(昭和30年)

◀現在の市役所庁舎が完成(昭和44年)



▲見田方遺跡発掘(昭和41年)

▼大袋にできた初の市営住宅(昭和40年)



▲福祉会館(昭和40年)

昭和40年代

日本の経済成長とともに 都市化するまち

農地の宅地化や地下鉄日比谷線の東武伊勢崎線への相互乗り入れなどに伴い、昭和42年(1967)には、人口が10万人を突破しました。都市化の進展でまちの様子も大きく変わり、人口の急増は、まちを活性化させる反面、さまざまな問題を抱えました。農地の埋め立てによる無秩序な住宅地の拡大、地下水の汲み上げによる地盤沈下、排水不良による浸水被害、汚水流出による河川の汚濁、交通事故や防災上の問題、学校や医療施設などの不足が生じてきました。これらに対応するため、市ではさまざまな方策が進められましたが、増え続ける人口に追われるようなまちづくりの時代が続きました。

一方、昭和42年には埼玉国体が開催され、越谷市ではバドミントン競技が行われました。また、この年、国道4号(草加バイパス)が開通し、高度経済成長に伴い増える交通量に対応しました。さらに、現在の市庁舎が完成、市制施行10周年を祝う式典とともに新築落成記念式典が執り行われました。

昭和30年代

越谷市誕生。 そして人口急増へ

昭和28年(1953)、町村合併促進法が施行され、町村合併の気運が高まる中、昭和29年11月に越谷地区2町8カ村が合併して、越谷町となりました。昭和30年9月には、町役場新庁舎が越ヶ谷一丁目に完成しました。その後、草加町の伊原、麦塚、上谷の越谷町への編入を経て、昭和33年11月3日、県下で22番目、全国で543番目に市制が施行され人口4万8318人の越谷市が誕生しました。

当時の暮らしに目を向けると、昭和31年に経済企画庁(現在の内閣府)から発表された経済白書の副題には「もはや戦後ではない」と記されており、日本経済は高度成長へと進み出しました。昭和35年には、人口が5万人を突破しました。また、人口の増加に合わせて地下鉄日比谷線が北越谷駅まで相互乗り入れ、首都圏のベッドタウンとして、その後の人口の急増時代を迎えることとなります。東京五輪開催で日本中が沸いた昭和39年、マイカー時代の到来に合わせて道路整備が進められ国道4号・草加バイパスの工事が始まりました。



▲越ヶ谷中学校(当時)の校庭で行われた第1回町民体育祭(昭和31年)



▲越谷町合併3周年記念式典(昭和32年)

◀第1回町内一周駅伝競走(昭和31年)



▲北越谷地区土地区画整理事業(昭和37年)



越ヶ谷商店街(越ヶ谷本町・中町)(昭和30年代)▶



▲消防署庁舎(昭和42年)



◀移動図書館しらこぼと号(昭和48年)



▲市制施行10周年並びに市庁舎新築落成記念式典(昭和44年)





▼越谷駅前通りの電線埋設工事が行われる(昭和60年代)



◀総合体育館が完成(昭和62年)

▼市民憲章の碑が完成(昭和53年)



▲市立病院が開院(昭和51年)



▲市制施行30周年記念式典(平成元年)



◀日本庭園「花田苑」が開園(平成3年)

昭和60年～平成6年

快適で便利な生活のため 都市基盤を整備

日本経済が安定成長に移行したところから人口の増加が落ち着きはじめ、スポーツや文化活動などの健康的で余暇を楽しむ生活が求められ、各施設の整備や各種団体の育成などの施策が進められました。昭和60年(1985)には、人口が25万人を突破しました。また、快適で便利な生活が営めるよう、道路や橋、公園、公共下水道、鉄道の複々線高架化工事など都市基盤の整備が進められました。昭和62年には、児童館コスモスの開館や県民健康福祉村のオープンがありました。昭和63年には、市制施行30周年を記念して「シラコバト」が市の鳥に制定されました。

平成に入ると東武鉄道伊勢崎線の連続立体交差事業が着工されました。平成3年(1991)には、近隣公園として全国初の本格的日本庭園「花田苑」が、平成5年には「こしがや能楽堂」が開館しました。平成6年には、伊勢崎線の一部高架が開通し、元荒川以南の踏切8カ所が解消されました。また、市の鳥「シラコバト」をデザインしたしらこぼと橋が開通し、市のシンボルとなりました。

昭和50年代

福祉・医療の充実と 快適な生活へ

昭和50年代に入ると、住民の医療や福祉に重点が置かれ、重度心身障がい者の医療費の無料化や看護専門学校の開校、市立病院の開院がありました。人口は年々増加し、昭和51年(1976)には、20万人を突破しました。また、人口の増加に伴い小・中学校が各地域で相次いで開校されました。市制施行20周年となる昭和53年には、「越谷市民であることに誇りと責任を持ち、水と緑と太陽に恵まれた豊かなまちを築くため限らない願いをこめて」という市民憲章が制定されました。昭和54年には、市民のふれあいを目的に建設が進められていた越谷コミュニティセンターが開館し、市制施行20周年記念式典が盛大に執り行われました。昭和57年になると千間台駅南陸橋が開通し、東西の往来が便利になりました。

住みよい環境として、生活の利便性だけでなく快適性(アメニティ)が求められるようになり、越谷の美しい自然を選んだ越谷アメニティ八景が選ばれ、絵はがきも発行されました。昭和58年には、市制施行25周年・文化都市宣言記念式典で文化都市宣言が多数の市民の前に宣言され、越谷市の一層の発展を祈りました。



▲市制施行20周年・越谷コミュニティセンター落成記念式典(昭和54年)



▲千間台駅南陸橋が開通(昭和57年)



▲中央市民会館が開館(平成4年)



▲大吉調節池が完成(平成3年)



◀大杉橋が開通(奥は旧橋)(平成3年)



▲市制施行25周年・文化都市宣言記念式典(昭和58年)



▲第1回消費生活展(昭和58年)



市立図書館が開館(昭和58年)▶



▲越谷ツインシティがオープン(平成24年)



▲「ガーヤちゃん」に特別住民票を交付(平成23年)



▲越谷市障害者就労訓練施設「しらこぼと」が開設(平成23年)



▲市制施行40周年記念式典(平成10年)



県立越谷西高校が甲子園に初出場(平成7年)



▲新しい大袋駅舎が誕生(平成25年)



▲旧東方村中村家住宅が開館(平成26年)



▲リオデジャネイロ大会に出場した星選手をイオンレイクタウンで行われたパブリックビューイングで応援。銅メダル獲得の当日に広報こしがや初の号外も発行された(平成28年)



▲大塚商会アルファーズ(現 大塚商会越谷アルファーズ)に支援書を交付(平成29年)



▶埼玉県立大学が開学(平成11年)



▲保存民家大間野町旧中村家住宅の一般公開を開始(平成16年)



▲平和都市宣言の碑(平成20年)



第1回越谷市美術展覧会(平成13年)▶



▲越谷レイクタウンオープニングフェスタ(平成20年)

▲市制施行50周年記念式典(平成20年)

中核市・越谷の誕生 さらに便利で豊かなまちへ

平成21年～平成30年

人口増加社会から人口減少社会へと移りゆくなかで、全国の自治体は以前にも増して、魅力あるまちづくりや住民サービスの向上に力を注ぐようになりました。越谷市でも中核市への移行を主に、より市民に身近できめ細かなサービスが提供できるよう取り組みが進められました。

平成21年(2009)には、越谷のまちづくりの基本となる越谷市自治基本条例が制定・施行されました。平成23年には、東日本大震災が発生し、越谷市にも大きな影響を与えました。平成24年には、越谷駅東口に越谷ツインシティが完成。再開発事業も完了し、越谷駅前の利便性が向上しました。平成25年には市北部を竜巻が襲い、大きな被害が発生しました。平成27年には、越谷市が中核市に移行。越谷市保健所の運用も開始されました。また、梶田隆章さんがノーベル物理学賞を受賞し、越谷市名誉市民に決定されました。平成28年には、星奈津美さんがオリンピックで2大会連続となる銅メダルを獲得し、越谷市民栄誉賞が贈られました。平成29年には、観光物産拠点施設「ガーヤちゃんの蔵屋敷」が越谷駅東口高架下にオープン。平成30年には、市制施行60周年記念式典が執り行われました。また、食に焦点を当てた「こしがや愛されグルメ」の認証や「こしがやの未来を創る魅力宣伝大使」の委嘱など、地域の誇りや魅力を発信する事業が始まりました。

越谷らしさを前面に打ち出した 魅力的なまちづくりへ

平成7年～平成20年

地方分権の進展により個性的で魅力的なまちづくりが求められるようになりました。人口の増加も緩やかとなり都市施設が充実し、成長するまちから成熟するまちへと変わりつつあるなかで、安心して健やかに暮らすことのできるまち、自然と共生する緑豊かなまちが求められました。

平成7年(1995)には、県立越谷西高等学校が市内で初の夏の甲子園出場の快挙を成し遂げました。平成8年には、人口が30万人を突破し、平成9年には、東武鉄道伊勢崎線が越谷駅以南で高架複々線となり、ますます利便性が高まりました。平成10年には、市制施行40周年記念式典が執り行われ、市のシンボルマークと子ども憲章が発表されました。平成11年には、福祉のまちの実現を目指して福祉憲章を制定しました。また、市民と行政との協働によるまちづくりを進めるため、第3次越谷市総合振興計画が平成12年に策定されました。平成16年には、彩の国まごころ国体の開催、国道4号東埼玉道路が開通しました。平成20年、JR武蔵野線の越谷レイクタウン駅が開業し、越谷レイクタウンがまちびらきました。また、市制施行50周年記念式典が執り行われ、国の安全と市民一人ひとりの幸せ、世界の恒久平和の実現を願い平和都市宣言が制定されました。

特集

祝市制施行60周年

越谷市、この10年間の変遷

平成21年～30年

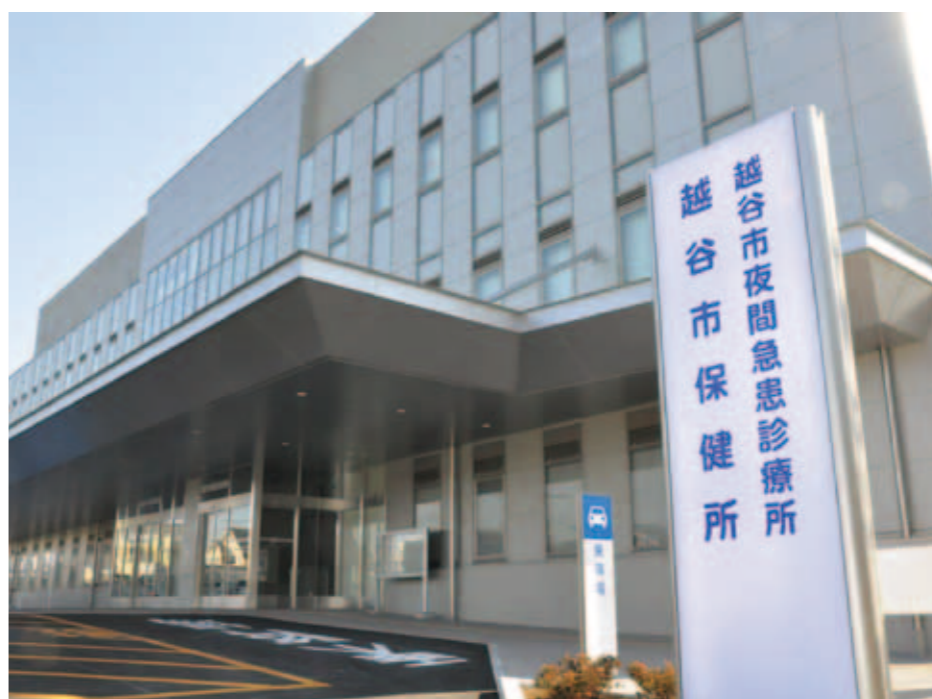
越谷市出身者の活躍、災害の発生、数十年にわたる事業の完了など、この10年間で越谷には大きな出来事がいくつもありました。ここでは、特に印象的だった出来事をご紹介します。

県内2市目の中核市へ移行。 名実ともに県東部地域の中心都市へ



▲市役所1階ロビーで行われた移行式。高橋市長による決意表明の後、くす玉が開披されました

平成27年4月1日、越谷市は、全国44市目、県内2市目の中核市に移行しました。これにより、福祉や環境、保健衛生、都市計画などの事務や許可など2024項目の権限が県から市に移り、市の自主的・主体的な判断のもと、従来よりも市民に身近なサービスの提供が可能になりました。また、越谷市保健所の設置や消防本部の高度救助隊の発足など、市民の安全・安心を守る分野においても新たな施設や組織が誕生。越谷市は県東部地域の中心都市として大きく歩みを進めました。



▲27年4月に開設した越谷市保健所

まちづくりの基本を定めた 条例が制定・施行

平成21年6月、「越谷市自治基本条例」が制定、9月に施行されました。近年、少子高齢化や市民ニーズの多様化など、社会環境が大きく変化したことで、市民と行政がお互いに協力してまちづくりに取り組むことが求められるようになりました。



▲多くの市民の参加により自治基本条例が形作られました

自治基本条例は、まちづくりの基本的な考え方や進め方、市民と行政がどのように協力すれば良いかを示したもので、市政への市民参加や協働の推進など、今後のまちづくりの規範となるものです。

希少な樹木や草花を集めた 植物園が開園



▲越谷アリタキ植物園の入口

平成22年10月、越谷アリタキ植物園が開園しました。植物学者の故・有瀧龍雄氏が国内外の植物を私有地に集めていたものを、遺族が市に寄贈され、植物園として整備したものです。約9000平方メートルの園内には市の天然記念物「ラクウショウ」や多種のツバキなど、約300種、1200本の植物が植えられ、市民ボランティアの手によって整備されています。

東日本を襲った巨大地震と津波。 越谷にも大きな影響が出る



▲第1体育館に集められた支援物資

平成23年3月11日、宮城県三陸沖でマグニチュード9.0の地震が発生。太平洋沿岸を襲った津波と合わせ、東日本を中心に多数の死者・行方不明者が出ました。越谷市内でも、ブロック崩壊などの物損被害や負傷者が発生したほか、電車の運行中止により帰宅困難者が続出。市内に複数開設した避難所に延べ1500人が避難するなど、混乱が起きました。市では、越谷市社会福祉協議会や、越谷市ボランティア連



▲計画停電によって消えた信号の下で交通整理する警察官

絡会をはじめとする多くのボランティアの協力によって集められた支援物資を被災各県へ輸送しました。また、多くのボランティアが、がれきの撤去作業などに向かいました。地震は直接的な被害を与えただけに留まりませんでした。複数の発電所や設備が被災したことで、電気の安定供給が困難になり、約半月にわたり計画停電が実施されました。さらに、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって放射性物質が拡散したため、市では公園や学校での放射線量、給食食材などの放射性物質を定期的に計測。また、原発事故により居住が困難となった地域から越谷市にも多くの方が避難するなど、市民の生活にも影響が出ました。

高齢者の憩いと ふれあいの施設が 市内2カ所にオープン



◀多くの利用者で盛り上がる「ふらっと」おおぶくろ

平成23年10月、蒲生駅前商店街に「ふらっと」がもう、25年10月に大袋商店街に「ふらっと」おおぶくろがオープンしました。この2つの施設は、近年社会問題となっ

ている高齢者の孤立化を防止、生きがいをつくることを目的としており、高齢者が交流するた

めの談話スペースが設けられ、さまざまな催しが行われているほか、スタッフも常駐しています。

また、「ふらっと」がもうオープンと同じ23年10月に、高齢者が介護保険施設などでボランティア活動を行い、ポイントを貯めることができる仕組みの介護支援ボランティア制度も立ち上がるなど、高齢者が地域でいきいきできる環境が整えられていきました。



▲にぎわう越谷いちごタウン

「越谷でイチゴ狩り」の 拠点となる観光農園が開園



ストロングベリーちゃん

市は、平成22年度から、J A越谷市と連携し、農業に意欲のある若者が観光農園を経営する技術・知識を学ぶ、「都市型農業経営者育成支援事業」をスタートさせました。

23年1月、この事業を推進する場として、農業技術センターの試験用の温室を改装した「越谷いちご観光農園」を開園。毎年、大変なにぎわいを見せています。

27年1月には農業技術センターに隣接する敷地に、全8棟、栽培面積1ヘクタールにも及ぶ大規模観光農園「越谷いちごタウン」が開園。毎年、大変なにぎわいを見せています。



越谷ツインシティの完成によって様変わりした越谷駅東口

越谷の玄関口が新たな姿に。 市民活動の拠点施設も開設

平成24年9月15日、越谷駅東口に越谷ツインシティがオープンしました。29階建てのAシティと、5階建てのBシティの2棟で構成されるこの施設は、平成2年の再開発推進協議会設立から進められてきた駅東口の再開発事業を象徴するものです。Aシティには住宅と商業施設、Bシティには公共施設と商業施設が整備され、駅前の利便性が大きく向上しました。

再開発事業では駅前広場や周辺道路の整備も行われ、特に駅前広場は2つのロータリーが設置されるなど、整備前の2倍、約7000平方メートルの広さとなりました。

また、越谷ツインシティのオープンに先立ち、24年6月にはBシティ内に市民活動支援センターが開設。



山車と越谷ツインシティ

▲Aシティの前を通る越ヶ谷秋まつりの山車。歴史ある神輿や山車と新たなシンボルの越谷ツインシティの対比が印象的です

市民活動の拠点としてつくられたこの施設では、市民団体が情報発信や情報交換、市民との交流を図ることができるような設備が整えられ、駅前広場を利用したイベントもたびたび行われるようになりました。このほか、Bシティ内にパスポートセンターと中央図書館が開設され、25年には越谷年金事務所がサ



▲市民活動支援センターではさまざまな分野の団体が活動しています

世界に誇る親水・環境のまち 越谷レイクタウンがついに完成



▲大相模調節池を中心に、住宅や商業施設が立ち並んでいます

平成26年、約39・5ヘクタールの大相模調節池が竣工し、越谷レイクタウンが完成しました。

昭和63年、大雨等による被害を防ぐための調節池の建設と、市街地の整備を一体的に行う「レイクタウン整備事業」が国の新規施策として設けられました。その後、平成11年に都市基盤整備公団(現UR都市機構)によって土地区画整理事業が始められ、長期にわたってまちづくりが進められました。

越谷レイクタウンは、20年4月



▲風で進むハンザディンギー。後ろは水辺のまちづくり館

にまちびらきを行って以降、次々と住宅や商業施設などが建てられ、1万7000人以上(30年8月時点)が住む大きなまちとなりました。休日になると、公園などで遊ぶ家族連れや、イオンレイクタウンを訪れる人などにぎわいます。

一方で、池のほとりにはハンザディンギー(小型ヨット)やカヌーなどで遊べる施設ができ、北西部には水辺の動植物が自然のままに生息する区画が設けられるなど、人と自然が共に生きていくことができるまちでもあります。21年、国際的な表彰「リアコムアワード」のプロジェクト賞で、日本で初めて金賞を受賞。28年には都市景観大賞で都市空間部門の大賞(国土交通大臣賞)に選ばれました。

越谷を突然襲った竜巻と大雨。市民の生活に大きな被害



▲竜巻で大きな被害を受けた大杉橋付近の住宅地



▲被災家屋から家財道具を運び出すボランティア

平成25年9月、さいたま市から茨城県坂東市へと抜ける巨大な竜巻が発生。越谷市でも北部の大杉、船渡、砂原などを中心に、重軽傷者合わせて75人、被災世帯数1668という非常に大きな被害を受けました。翌日には気象庁が竜巻の規模をF2（風速が約7秒間の平均で秒速50〜69メートル）と推定。公共施設も被災し、特に、調理器具が破損した第二学校給食センターは、業務を再開するまで半年以上を要しました。

竜巻は市民生活に大きな影響を与え、市内5カ所に開設された避難所には、半月後に

すべて閉鎖されるまでに、延べ268人が身を寄せました。また、自宅などが被災した住民のためにブルーシート約9000枚、土のう袋約1万9000枚などが配布され、屋根や壁の応急処置、がれきの撤去などを行う様子があちらこちらで見られました。



▲大雨で冠水したせんげん台駅東口

一方で市民による支援の輪が広がり、連合婦人会や自治会による炊き出しが行われたほか、延べ約2000人のボランティアが被災家屋の清掃やがれきの撤去、家財の搬出などの支援を行いました。また、全国から約4600万円の義援金が集まり、被災者へと送られました。27年9月には台風18号の影響による記録的な大雨で、関東北部に大きな被害が発生。越谷市では1時間当たり40ミリを超える雨量を観測しました。

これにより、東武スカイツリーラインせんげん台駅東口をはじめ市内各所で道路が冠水したほか、46カ所で道路が通行止めとなりました。建物の被害も多く、桜井、新方の増林地区を中心に、住宅等668件の床上・床下浸水被害が発生しました。また、鉄道の運転見合わせや学校の休校も相次ぎました。近年まれに見る2つの災害の発生によって、日頃の備えがいかに重要であるかが再認識されました。

「越谷」の名が全国を走る。ガーヤちゃんのデザインが入ったナンバープレートも制作



▲越谷ナンバーを付けた車に笑顔の高橋市長

平成26年11月、越谷駅東口駅前広場で、越谷ナンバー出発式が開催されました。それまで、越谷市で新たに登録された自動車には春日部ナンバーが付けられていましたが、25年に国が募集した地域の活性化や知名度の向上を目的とした、いわゆる「ご当地ナンバー」（第2弾）に、中核市への移行を控え、市の魅力発信を目指していた越谷市が応募し、越谷ナンバー導入が実現しました。事前の市民アンケートでも約8割が導入に賛成。ふるさと越谷の発展のため、市民も力強く



▲自動車用越谷版図柄入りナンバープレート



▶原付バイクオリジナルナンバープレート

後押ししました。

また、27年4月には中核市移行を記念して、原付バイクのオリジナルナンバープレートの交付を開始。しらかばと橋を背景に羽ばたく越谷特別市民ガーヤちゃんのデザインが人気となりました。

さらに30年5月には、自動車用の越谷版図柄入りナンバープレートのデザインにもガーヤちゃんのデザインが採用されることが決定。10月から交付が始まり、「越谷」の名称とガーヤちゃんが全国を駆け巡ることになりました。

水郷こしがやを象徴する親水施設と越谷の観光物産拠点施設が完成



▲川面を抜ける風を感じられる散歩コースとしても人気の「葛西用水ウッドデッキ」

平成23年度から27年度にかけて、市役所東側の葛西用水沿いに葛西用水ウッドデッキが整備され、越谷の豊かな水辺を生かした新たなにぎわいと憩いの場となりました。また、ウッドデッキの整備にあわせ、用水内に飛び石等も設置されました。用水の水位が下がる秋冬を含め、1年を通して水辺に親しむことができるスポットです。

現在では毎年恒例のキャンドルナイトや「KOSHIGAYA してごと市」も広く定着。音楽やグ



▲特徴的な外観に、思わず中をのぞいてみたくなる「ガーヤちゃんの蔵屋敷」

ルイベントもたびたび開催され、市民に親しまれています。29年5月には、越谷駅東口に新たな観光物産拠点施設「ガーヤちゃんの蔵屋敷」がオープン。日光街道の宿場町の歴史を持つ越谷らしさのある、蔵をイメージした外観の建物が特徴的です。

店内では、越谷の名産品や伝統的手工芸品の販売、せんべいの手焼き体験やだるまの絵付け体験、パンフレットや鉄道ジオラマでの市内観光スポットの案内などを行っています。越谷の魅力が市内外へ発信する施設として注目されています。

越谷の歴史で初の快挙。 越谷市民からノーベル賞受賞者が誕生



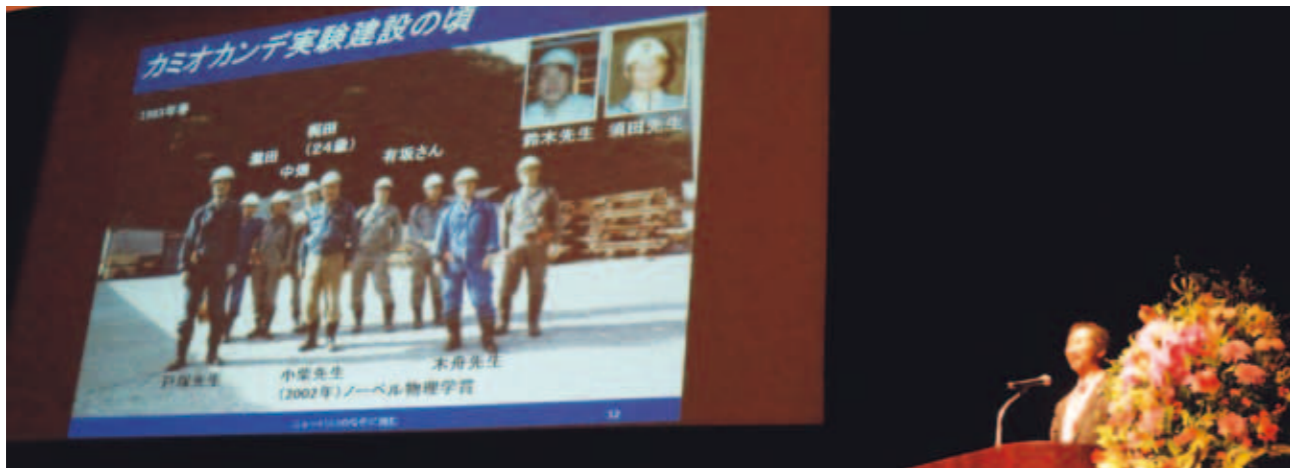
平成27年10月、越谷市民で東京大学宇宙線研究所長の梶田隆章さんのノーベル物理学賞受賞が決定しました。

梶田さんは、観測装置「スーパーカミオカンデ」で素粒子「ニュートリノ」を調査し、ニュートリノ振動という現象から、ニュートリノに質量があることを発見。素粒子理論の定説を覆す研究成果が高く評価され、ノーベル物理学賞の受賞に至りました。

市ではこの偉業をたたえ、梶田さんを越谷市名誉市民に推薦。27年12月の定例市議会

で、秋山長作元教育長（故人）以来5人目の名誉市民となることが決定されました。名誉市民の決定は、昭和57年以来、33年ぶりの出来事でした。

越谷市から初となるノーベル賞受賞者が輩出されたことは、市民に大きな驚きをもって受け止められ、28年2月にサンシティ大ホールで開かれた名誉市民称号贈呈式・記念講演会にも多くの注目が集まりました。市内の小中高生をはじめ約1600人の来場者でホールは満員となりました。



▲記念講演会で「広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備を」とメッセージを発した梶田さん



▲講演「ニュートリノのなぞに挑む」に聞き入る満員の聴衆



▲代表で質問した小中高生と笑顔で記念写真に応じる梶田さん

越谷ゆかりの3選手がオリンピックで活躍。 市民も声をからして応援



▶市民栄誉賞受賞式で、獲得した2つのメダルを披露する星さん（平成28年9月）。リオ大会後に現役を引退し、各地での講演やテレビ・イベントへの出演などで水泳の普及に努めている

平成24年のロンドンと28年のリオデジャネイロ。この2つの大会に、越谷市から3人の選手が出場しました。

1人は競泳の星奈津美さん。20年の北京大会から3大会連続出場を果たし、ロンドン大会とリオ大会では、ともに200メートルバタフライで銅メダルを獲得。リオ大会後にはそのすばらしい功績をたたえ、第1号となる越谷市民栄誉賞が贈られました。

もう1人がアーティスティックスイミング（当時はシンクロナイズドスイミングと称）の足立夢実さん。ロンドン大会でチーム競技に出場し、5位入賞の立役者となりました。

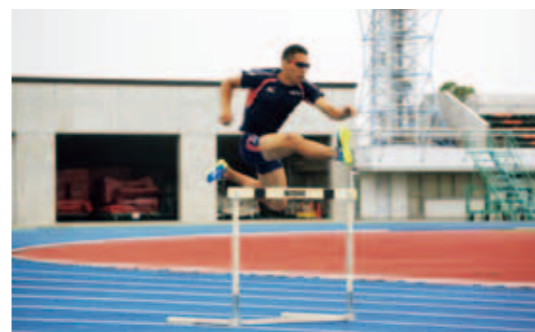
最後の1人が陸上の杉町マハウさん。8歳で来日し、祖



▲華麗な演技を見せる足立さん（平成30年）。現在はアーティスティックスイミングのミックス（男女混合）デュエット日本代表として世界に挑んでいる

国ブラジルの代表としてリオ大会に出場（北京大会以来2度目）。400メートルハードルで準決勝進出を果たしました。

越谷そして国の期待を背に躍動する3選手を、市民は声をからして応援し、競技終了後には惜しみない拍手を送りました。



▲リオ大会へ向け、しらこぼと陸上競技場で練習に励む杉町さん（平成28年）。大会後も、400メートルハードルを専門に、さらなる活躍を目指し日々奮闘する

市内で初の パブリックビューイングも 開催

リオ大会では星さんを応援しようと、イオンレイクタウンのイオンホールで、200メートルバタフライ準決勝・決勝のパブリックビューイングが行われました。メダルの期待がかかる決勝には、星さんの家族や友人、高橋市長ら350人が応援に駆けつけました。銅メダル獲得の瞬間には、会場は大歓声に包まれ、健闘をたたえました。